

1. How did you start working with Klaus Dinger?

クラウス・ディンガーとのコラボレーションはどのように始まったのか？

Vicky (Viktoria Wehrmeister - Toresh, DECHA, www.vickywehrmeister.de)

1999年に私が歌っていたバンドのレコードを聴いたクラウスから電話があって、デュッセルドルフのカフェで待ち合わせて話をしたのが最初だった。ミラーのサングラスをかけて表れたクラウスは NEU! も La Düsseldorf も知らない私を、もし良かったらスタジオに来て歌わないかと誘った。そのまま自転車に乗って、陽の光があふれる外から薄暗いスタジオへとゆき、直ぐにテープの録音機を起動させて HERO を録音した。この曲は La!NEU? というプロジェクトのファーストアルバムの曲として、1996年にキャプテントリップというレーベルからリリースされた。

私は自然自発的で、とてもチャーミングなエネルギーに満ちあふれたクラウスが気に入った。

Andreas (Andreas Reihse - Kreidler www.ikreidler.de) クラウスと知り合ったのはクライドラーの初期、90年代始めが中頃だった。クライドラーのベーシスト、シュテファン・シュナイダーと、スチュワーデスレーベル、現在のイタリックのマーク・クナウアーと一緒にデュッセルドルフの60年代、70年代の音楽の歴史をリサーチしようと彼を訪ねたんだ。クライドラーのデットレフがバイトをしていたコピー屋に、クラフトワークのテキストとデザインをしていたエミール・シュルテが良く来ていた縁で、一方、クラウスのバンド DIE ENGEL DES HERRN のメンバー、ゲーハート・ミヒルがクライドラーのコンサートへ来ていて、そこからクラウスへとつながったんだ。僕らクライドラーはクラウスのスタジオで一度だけセッションを行った。しかし、デットレフはDJをしていたため、クラウスに音楽家として認められずに参加できず、この録音も発表される事は無かった。このセッションの後僕ひとりとはクラウスとよく何度も会った。この時期は未だ一緒に音楽をすることはなかったが、クラウスの頭の中には La!NEU? のアイデアは既にあっただろう。こうやって知り合い、信頼関係を深めてゆく事はクラウスにとって大切な事だった。自ら好む好まざるにも、La Düsseldorf バンド内部決裂、ノイ! のパートナー、ローターとの不和、レコード会社との裁判沙汰、メディアとの諍いなど、クラウスは長年一人で戦い続け 孤独だった。

Kazu (尾之内和之 - www.k-onouchi.com)

1999年秋、中尾さんの紹介によってクラウスと出会いました。彼は、アーティストでありつつもレコーディング、ミックスができる人を探していて、芸術家であり友人である中尾さんにたずねていたそうです。その後 VIVA (2nd La Düsseldorf album) を一緒にリミックスしたいということで、2000年から彼のマルチトラックテープをデジタル化することや、過去に彼が集めた友人たちの “spontaneous” (自発的) な表現からできる音楽など、コラージュ的であり断片的な表現を編集することからスタートしました。

Nakao (中尾正樹 - www.masaki-nakao.com)

デュッセルドルフ芸術学院にて、互いに美大生同士の知人でもあり、当時のラ!ノイ? のヴォーカリストとしても活動していたヴィクトリア・ヴェアマイスターからの紹介により1998年の初夏、クラウスと知り合う事となる。そして同年冬、オランダ西部のゼーランドにあるスタジオに同行した際、まずは、クラウスから勧めもあり、そのスタジオにあったハーモニウム(足踏み式リードオルガン)を弾いたり、ハーモニカを吹いたりする機会を得るなどして、全く自由な環境の元、直感を信じ自発的に何かを音に拠って模索することの素晴らしさを知る事となった。現在からすれば、それがクラウスとの交流の、そもそもの始まりであった。1999年以降、よりゼーランドのみならず、クラウスのデュッセルドルフのスタジオをもしばしば訪れるようになり、次第にクラウスの元に集うミュージシャン達とも合流する折には、それらの人々とのセッションも自発的に参加する機会を得る事となった。

2. How did it work in Studio? クラウスとのスタジオ作業はどんなかんじでしたか？

How did you make music together? どのように一緒に音楽を作りましたか？

Vicky 私たちは庭に集って、コーヒーやタバコ等を楽しみながら、長い時間語り合った。時が満ちたのを感じる

とクラウドがスタジオに入ろう、と言って、スタジオにゆき、テープの録音機を起動させて録音をした。クラウドはいつも『その時』を待っていた。リハーサルや練習などは無く、そうゆう事について話し合うこともなかった。スタジオでの過程は、耳を傾ける事、感じる事が中心だった。

ラ!ノイ? (1995-1998)のプロジェクトで、クラウドの弟、トーマスとレンブラントとクラウドと一緒に録音した夏の日を思い出す。トーマスがバイオリンを手にもって訪問して来て、気がついたらみんなスタジオに入り、クラウドと一緒にセッションをした。二人の兄弟間の長年の確執と、その後の傷について知っていた私はそのひとときの体験をわすれない。それは音楽のみがなし得ることだった。

全ての人にそれぞれの場があたえられる、音楽。ラ!ノイ?のアルバム、Goldregenにそれを聞く事ができる。今は亡き二人のことを良く思い返す、二人がいないのはとても悲しい。

Andreas ゼーランドのスタジオは納屋を改装したものだった。母屋にキッチンと旧式の便所があり、用を足した後はそのバケツを持って出て、自ら庭に穴を掘ってうめなくてはならなかった。プロダクションは春先の暖くなる頃からはじまり、5月、そして夏至の頃がピークだった。僕は正直いってテントが大嫌いだったが、クラウドは皆が庭にテントをはってそこに泊まるよう命じた。日中はよく海に行ったり、庭でゆっくりしたりして、夜はたき火をして、数知れないアルコール、その他が消費された。いつしか誰かがスタジオへはいり、その後へ続く者もいたり、いなかったり。全く誰もスタジオに入らないときもあった。クラウドはいつも『マジックな瞬間』を待っていた。アルコールやその他のものはその『瞬間』を生み出すのを助けるものだが、集まった全員一同にその効果を期待するのは無理な事だった。少なくとも僕が立ち会ったときには。結果としてはもっとも近いグループが集まったときが一番効果があった。例えばVicky, 僕とThea, Klausなど、そしてもちろんJapandorfのメンバーも。時には少人数のときこそ、信頼は大きく、シンプルで軽やかに流れる様に音楽ができた。

Kazu いろいろなフォーマットで録音された音源をPCに取り込み、クラウドと一緒にミックスしていきました。クラウドの意見を具体化していった感じです。

Nakao 2000年、カズユキ・オノウチも合流し、先ずは制約のない

自由闊達な創作のプロセスはクラウドの元、セッション形式でも行われる様になり、次第にそれらの過程は逐次、録音されつつ、独自で演繹的(独学的、オートダイダクティブ)に様々なテーマ性を以って展開される事となった。

3. Could you describe the process of preJapandorf production?

このアルバムの制作の過程はどのような流れでしたか?

Vicky クラウドは、自身のプロジェクトにいつも『人』を探し求めていた。音楽家などではなく、『人』をさがしていた。1996年、ラ!ノイ?の日本ツアーの前に、私は同じく芸術アカデミーに在学していたNakaoに、日本語でいくつかの簡単な言い回しをおしえてもらった。例えば『ビールをください』、これを録音しておいたものを、クラウドが気に入って、東京と大阪の舞台でプレイバックした。

その後クラウドはNakaoと出会い、Nakaoもゼーランドに来る様になり、次第に色々な人がゼーランドへ集まって来た。ゼーランド、そこはオアシス。すぐそこが海で、自然そのままの庭、バラの花、沢山のベリー、樹々は風に揺れ、大きな空の下に点々とテント。夜は皆でたき火をして、海の潮の香りのする髪、甘い梅酒の香り、足元はあたたかく、頬は火照って赤く。。。スタジオの扉はいつでも空いていて、すべてを受け入れる用意はできていた。

Kazu このアルバムは、スナップショットをとる感じというか音楽を写真的に記憶しておく、その場の雰囲気をとる感じ。可能性を感じた瞬間に録音ボタン押し、とにかく録音しておく、テープになにか残っていればという感じで、大量のセッションテープがあります。当時、24trのADATのデジタルテープに録音し、そしてこれらのアーカイブを作っていく感じです。その後、Protoolsに取り込みミックスしていきました。

Nakao 自分の立場からすれば、それらは押し並べて、テーマ性の決定の段階も含め、決まり切ったコンセプト

ルな行程が踏まれたものではなく、その都度、クラウドと共に互いにその場にて、自発的かつ直感的な内容によって、それぞれの手段を通じセッションとして展開されたものであった様に思う。

4. Could you please describe Klaus from your view?

クラウドはどんな人でしたか？あなたは何をクラウドから学びましたか？

Vicky クラウドはふところのおおきな、明るく自由な心をもっていた。理想にあふれて、いつでも正しい事のために戦う人だった。クラウドは 私が私らしく自らを信じ、自身を持てるように、信頼し勇気をもたせてくれた。それはすばらしく気持ちがよかった。その頃、芸術アカデミーで勉強していた私が、教授や学校に求めても見つからなかった、自由、勇気、エネルギーをクラウドから学んだ。クラウドと出会うことができて、本当によかった。

Andreas クラウドとであった頃の僕はクライドラーとして音楽をやると同時に、左翼系のタウン誌の編集をしたり、広告会社でグラフィックの仕事をしていた。皆、親切な人達だったが、広告業界はおもしろくなく、収入の為にやっていた。本当は音楽で食べてゆきたかった。当時の彼女の父親がフリーの建築家で、まったく妥協せず、その事によって案ではない生き方をしていた、クラウドに似たラディカルさがあった。この二人の姿勢が当時の僕の背中を押してくれた。音楽をやるなら、ちゃんとやれ、音楽するのだ、と。そしてその後夢は叶ったのだ、もちろん山あり谷ありだが。それ以来、自分のかかわる音楽はいつもアートとつながっている。クラウドがいないのは本当に残念な事だ。

Kazu 記憶の重要性。とにかく何か残すということが、未来にとって必要だということを学びました。

Nakao 自分にとってクラウドは、今も尚、比較できる対象など到底見つける事のできない“破天荒“で総合的なクンストラ（芸術家）としての存在である。その彼に拠って絶えず示されていた、互いの自発性や直感性を最大限尊重しつつ、独学的(オートダイダクティブ)に様々な要素を展開させていくという、方式と環境に直に出会い、また彼の元で活動できた事は現在も尚、本当に掛け替え無い体験を得られたものと想っている。

5. Which position do you think this album takes in Klaus' work and music?

このアルバムはクラウドの音楽の系譜の中でどのような位置をしめるとおもいますか？

Kazu このアルバムは彼にとってのドキュメントとして自分が何を感じていたのかが現れています。

6. When you listen this album now, is it still actual?

今、この音楽を聴いてみていかがですか？現在にも繋がる部分はありますか？

Kazu 今現在、日本に帰国しましたが、色々なアーティストと関わり作品を仕上げっていますが、それらが彼らのそして自分のドキュメントとして、自由な作品作りをしていきたいと心がけています。

8. Klaus was strongly inspired by year 2000, do you think it has proven its truth?

クラウドは2000年に強いインスピレーションを感じていました。それは実際に証明されたと思いますか？

Kazu 2000年は、彼にとってある意味“CHA CHA 2000!”のようなゴールであり、明るい未来だったのかもしれない。それを記憶することは必然でもあり、そこから先に続く未来も同時に確認したのだと思います。それが”Japandorf”だと考えています